

誰にでもは出来ないO A化から

3 J-6

誰にでも出来るO A化へ

— 何故誰にでもは出来ないか —

今井 恒雄、増田 秋俊(富士通) 平木 しげ子(東京家政学院筑波短大)
荒木 雄豪(京産大) 古谷 千恵(東大生研)

1. はじめに

我々はこれまで大学・高校での業務システムの開発経験から、適切な指導と教育があれば、コンピュータに関しての知識が皆無の業務担当者が大半の開発と保守を担当できることを実証してきた。即ち、「誰にでも出来るO A化」を実践してきたわけだが、今回は現在のシステム開発の実態から「何故誰にでもは出来ないのか・しないのか」を分析したい。

2. 世の中のO A化の現状

技術の発展の過程が現在の状況を作り上げた。コンピュータが使われ始めた時には機械語とかアセンブラでしかアプリケーションプログラムを書く手段がなかった。だからシステムを作る人はコンピュータに精通した技術を持っていることが必須条件であった。この流れは少しずつ改善されてきてはいるが、いまだにコンピュータは難しく専門家の仕事であるという考え方が前提になっており、システム開発に携わる人達も無意識の内にそう考えている。

現在、エンドユーザコンピューティングといっ

て、例えば、定型業務や基幹業務のシステムからデータをもらい、部門の管理資料を作るために表計算等で使用するケースはあるが、これは部門全体のO A化を部門で開発することとはつながりをもっていない。

3. 何故誰にでもは出来ないか

(1) システム開発の考え方

・誰もが素人には出来ないと思っている。

コンピュータソフトの作成は素人には出来ないというのが世間一般の常識で、自社のシステム開発をの自社の社員だけで作ってみようとは誰も思わない。

・O A化の考え方や手順、道具などについて初心者に分かりやすく解説した本もない。

・仕事が忙しいので出来ないと思っている。

まず例外なく仕事が忙しい。O A化のためのシステム開発をやる時間などとても割けないというのが大多数の人達の考え方である。

(2) 外部へ委託する時のシステム開発の進め方

コンピュータは難しいと思っているから、現場の担当者も導入を決める人も自分達でシステム開

A Basis of Software Design

Tuneo IMAI¹, Akitosi MASUDA¹, Sigeko HIRAKI², Hugo ARAKI³, Tie HURUTANI⁴

1 Fujitsu Ltd. 2 Tokyo Kasei Gakuin Tukuba Junior College 3 Kyoto Sangyo Univ.

4 Institute of Industrial Science, University of Tokyo.

発をしようとは考えもしない。

業務をOA化する時に自分達の業務の内容のすべてを説明書の形にしてあることは少ない。仕事上の例外事項はいくらでもあり、手作業では業務担当者はそれらを経験上、意識することなしに、こなすことができる。

しかし、これをOA化する時にすべての条件を洗い出し、しかもコンピュータを使ったときの仕事の流れ、入力や出力をすべて完全に決めるのは並大抵の努力では出来ない。

開発を請け負う方ではとにかく後で手直しがないように、仕様をきっちりときめるように迫るがこれらは開発を請け負う側の論理であり、委託する側からすると、大変なことである。

「システムを運用してから変更要求がでるのは当たり前である」という認識で仕事はしない。

依頼する側の気持ちと請け負う側の気持ちのギャップは余りにも大きいがこの原因は主に、

- ・「仕事とはどういうものか」という基本的な考え方を持っていない。
- ・開発規模が大きくなり、開発期間が延びることで発生する費用の問題で思いきった事が出来ない。

ということであろう。

仕様変更をどんどん受けるとそれだけ開発費用が増えるが、約束の契約金額が増える訳ではない。同じく開発期間もそのままにしておくで延びるが業務の関係で運用時期は簡単には変更出来ないし延ばすと延ばしただけ、請け負った側では人を確保する期間が延びるので結果として開発費用の増加に結びつく。

これはOA化したシステムは運用後も業務側ではメンテナンス出来ない事が一番大きな原因である。自分達が分かり、自分達で出来るシステムであればそんなに厳しいことは言わなくても解決することが多い。

(3) 生産技術は専門技術者の道具

現在生産性の向上を目指して色々な考え方や道

具が作られているが、まだまだシステム開発に携わる専門家が使う道具の範囲を越えていない。

富士通のCASET(第4世代言語)やSDEM(システム開発標準)にしても所詮専門家の道具である。

CASEツールにしても請け負うがシステム開発するのに生産性をあげるためと、メンテナンスをやりやすくするための道具であって、決して、「現場の業務担当者が誰にでも使いこなせる」という発想でものを作ってはいない。

4. おわりに

東京家政学院筑波短期大学では、学生が我々の考え方である「誰にでも出来るOA化」の方式で図書館業務などのOA化をおこなっているが(第44回及び第46回情報処理学会全国大会で発表済み)、これを経験した学生が卒業し、会社に入って受ける教育は全く違ったものであり、考え方も世間一般の常識的なものになってしまう。

会社の仕組みと教育でそうなるのだから、これからは業界を始めとする世の中全体がシステム開発に対してもっと柔軟な発想転換をしないと、OA化がさらに進みコンピュータの利用範囲も広くなる時代に対応出来なくなるのではなからうか。

今回は、学生時代は「誰にでも出来るOA化」を実践し、会社に入ってから「誰にでも出来ないOA化」を経験した卒業生の体験を含めた発表をする予定である。

[参考文献]

- ①「ファイル処理入門—COBOLの文法」
著者：平木, 荒木, 今井 (恒星社厚生閣)
- ②「COBOLによる業務プログラムの作成(I)」
著者：平木 (恒星社厚生閣)
- ③「COBOLによる業務プログラムの作成(II)」
著者：平木 (恒星社厚生閣)
- ④「PFD入門—FACOM大型ユーザーのために—」
著者：今井, 荒木, 平木 (恒星社厚生閣)
- ⑤「システム設計入門」
著者：平木, 今井, 荒木 (恒星社厚生閣)